

創世記15章6節 「信仰による義」

1A 跡取りがない中での信仰

1B 子孫の約束

1C 「女の子孫」からの発展

1D 大いなる国民

2D 地のちり、星の数

3D 永久の地の所有

2C あり得ない中での約束

1D サラの不妊

2D 負い目

2B 神の恵み

1C 慈しみ深さによる悔い改め

2C 恵みによる栄光

2A 神の義

1B 義の賜物

1C 義人のいない世界

2C 不敬虔な者たち

2B みなされる義

1C 不敬虔な者の義認

2C キリストの現れ

1D 御霊による従順

2D 私の内におられるキリスト

本文

創世記 15 章を開いてください。聖書通読の学び、今日は午後礼拝で、14-15 章を一節ずつ見
ていきます。今朝は、15 章 6 節に注目します。「**アブラムは主を信じた。それで、それが彼の義と
認められた。**」信じたということが、神から義と認められるということをお話したいと思います。

今、私たちの教会が使用している聖書は、「新改訳 2017」というものです。2017 年に出版された
ものですが、そこには「宗教改革五百周年」の意味が込められています。ルターによる宗教改革
が始まったのは、1517 年だからです。

その宗教改革の始まりこそが、「信仰による義」でした。彼はカトリック教会での修道僧になりま
した。そして、修道院で聖書を教える教授となります。その講義は、「詩篇」と、パウロのローマ人

への手紙です。

彼は、修道僧になったものの、どんなに告解、つまり懺悔しても、罪の意識が出てきます。「おお、私の罪、私の罪、私の罪」と嘆いていました。神は、自分に対して満足しておられない。いや、怒っておられる。私は裁かれるに違いないと思っていました。しかし、神から恵みを受け取るために、ないおっそう、祈り、断食をし、告解を繰り返しました。がんじがらめです。一日に何度も、懺悔室にいて告解して、神経病者のようになってしまいます。神に対して怒りさえ抱いていました。

それで、その聖書を教える講義を任せ、詩篇を研究しているうちに、「31:1 あなたの義によって私を助け出してください。」という言葉に出会います。神の義は、怒りや裁きのことではないかと思っていたルターは、助け出すという、神の救いにつながっていることに驚きます。そして、「71:2 あなたの義によって私を救い助け出してください。」という言葉には、キリストがここに示されているとさえ考えました。

そしてロマ 1 章 17 節には、こう書いてあります。「福音には神の義が啓示されていて、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。」神の義について、それは福音、良き知らせであると書いてあります。そして、義人は信仰によって生きるのです。つまり、神の義とは、神から与えられる恵みの賜物であって、イエス・キリストによって与えられると理解したのです。この悟りによって、ルターは、「天国に入ったようだ」とまで言いました。今までの不安、混乱、苦しみが消えたのです。¹

長くなりましたが、これが、聖書に示されている神の義であり、神は、それをご自身に信頼して、その約束を信じ、受け入れる者に与えられるということです。アブラムの、この出来事を見ながら、信仰による義についてじっくりと見ていきたいと思えます。

1A 跡取りがない中での信仰

1B 子孫の約束

アブラムは、ロトとその家族、また財産を取り返してから、メルキゼデクの祝福を受けました。けれども、ソドムの王のものから取り分は受け取りませんでした。彼は、戦いの中で恐れがあります。また、そのようにして当たり前のように受け取ることで、大きな財産を一切断りました。そこで主ご自身が、慰められるのです。「15:1 アブラムよ、恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたへの報いは非常に大きい。」

そこで彼が、最も気になっていたことを主に訴えます。報いというならば、自分に跡継ぎの子がいるべきではないかと。「15:2 神、主よ、あなたは私に何を下さるのですか。私は子がないままで

¹ <https://youtu.be/xnjdsyR1fWY> <https://julius-caesar1958.amebaownd.com/posts/8692631/>

死のうとしています。私の家の相続人は、ダマスコのエリエゼルなのでしょうか。」アブラムは、すでに年老いています。けれども、だれも自分の家を受け継ぐ子がいないのです。それで、自分のしもべが、跡取りになるのでしょうと言っています。

1C 「女の子孫」からの発展

彼には、大きな心の葛藤があったに違いありません。当時の族長社会で、自分の名が代々、受け継ぐ子孫によって残されるということが、その人の尊厳を支えました。しかし、自分の妻サライは不妊なのです。しかし、主に呼び出されて、ここカナン之地まで来たのです。

1D. 大いなる国民

しかも、主は、何回かに渡って、彼に大いなる約束をしてくださっていました。神の示される地に行けば、彼を祝福して、彼の名を大いなるものとして、彼を「大いなる国民」とするというのです。彼の家が栄えるどころか、彼から多くの子孫が現れて、それで国民にまでなると約束されたのです。

そして、アブラムは、昔からの神の約束も、言い伝えで聞いていた事でしょう。それは、神が蛇に対して、「3:15 わたしは敵意を、…おまえの子孫と女の子孫との間に置く。彼はおまえの頭を打ち、おまえは彼のかかとを打つ。」子孫から、女から出てくる息子が、アダムが罪を犯したことによって失ったものを、すべて悪魔から奪還するという約束があったのです。だから、子孫が世界を救うのだという期待もあるのです。

2D. 地のちり、星の数

そして主は、彼がカナン之地に着くと、「わたしは、あなたの子孫にこの地を与える(12:7)」と約束し、さらにロトと別れた時は、地のちりのようになると約束されたのです。「13:16 わたしは、あなたの子孫を地のちりのように増やす。もし人が、地のちりを数えることができるなら、あなたの子孫も数えることができる。」

3D. 永久の地の所有

それだけではありません。その、数えきれない子孫に、この地を永久に与えるとまで約束されたのです。「13:15 わたしは、あなたが見渡しているこの地をすべて、あなたに、そしてあなたの子孫に永久に与えるからだ。」

子孫が増え広がり、造られたものを支配するのは、元々、アダムに与えられていた祝福命令です。それが、アブラハムに与えられています。子孫が多くなり、所有する土地が与えられます。そして、彼から女の子孫、キリストが現れることも約束されているのです。この方によって、すべての諸国民が祝福されるのです。

2C あり得ない中での約束

1D... サラの不妊

こんな、とてつもない約束が与えられているのですが、先ほど言いましたように、アブラムの家族は、当時の基準からすると、あまりにも情けない状況にありました。サライが不妊なのです。アブラムがハランを発ったのは 75 歳、サライは 65 歳です。

2D... 負い目

しかし、そんな負い目を持っているアブラムに、主は、とてつもない大きな約束をされます。

しかし主は、そのようにして、ご自分の福音を明らかにされるのです。なぜなら、主は、ないところからあるようにされる方であり、死んでいるところに、いのちを与えられる方です。ロマ 4 章を見れば、アブラムが信じがたい時に信じるというところに、信仰の骨頂があることを教えています。神が、イエスをよみがえらせる方、いのちの神、復活の神であることが示されているからです。「ロマ 4:23-24 しかし、「彼には、それが義と認められた」と書かれたのは、ただ彼のためだけでなく、24 私たちのためでもあります。すなわち、私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、義と認められるのです。」

ですから、みなさんが、自分には望みがない、良いと思えるところはないとお思いであるならば、みなさんにも、アブラムと同じように良い知らせがあるのだということなのです。

2B 神の恵み

覚えていますか、主は、人をご自分のかたちに取り戻すのに、恵みによって取り戻されることを決められました。ノアがいけにえを献げた後に、こう思われました。「8:21 わたしは、決して再び人のゆえに、大地にのろいをもたらさしめない。人の心が思い図ることは、幼いときから悪であるからだ。」幼い時から悪であるから、悪だからといって裁いていたら、何度も何度も滅ぼさないとはいけません。そうではなく、初めから悪だから、ご自分の憐れみと恵みによって彼らを救うように、お決めになったのです。

1C 慈しみ深さによる悔い改め

そして、冒頭で、ご紹介したルターのように、私たちの欠点や落ち度に対して、怒る神ではなく、神のいつくしみ深さがかえって、人を変えていくのだということを聖書は教えています。「ロマ 2:4 神のいつくしみ深さがあなたを悔い改めに導く・・・」とあります。

2C 恵みによる栄光

そして神は、罪の中にいる者、弱い者、取るに足りない者、そういった者たちを、かえって選ばれます。なぜか？もし、できる人を選んでいれば、それはその人ができたということで、栄光がその

人に行くからです。けれども、できない人が選ばれたら、その人が変えられたら、変えた神に栄光が行きます。

長くなりますが、第一コリント 1 章 26-30 節を読みます。「26 兄弟たち、自分たちの召しのことを考えてみなさい。人間的に見れば知者は多くはなく、力ある者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。27 しかし神は、知恵ある者を恥じ入らせるために、この世の愚かな者を選び、強い者を恥じ入らせるために、この世の弱い者を選びました。28 有るものを無いものとするために、この世の取るに足りない者や見下されている者、すなわち無に等しい者を神は選ばれたのです。29 肉なる者がだれも神の御前で誇ることをしないようにするためです。30 しかし、あなたがたは神によってキリスト・イエスのうちにあります。キリストは、私たちにとって神からの知恵、すなわち、義と聖と贖いになりました。31 「誇る者は主を誇れ」と書いてあるとおりになるためです。」このように、主は、ふさわしくない者を選ばれることにより、すべて良きものは神から出ていることを、人々に知らせるようにされています。

2A 神の義

1B 義の賜物

そして、「**アブラムは主を信じた。それで、それが彼の義と認められた**」ということについて、冒頭で説明しました。この「義」というのは、神ご自身の義であって、アブラムの義ではないことです。神が義であられて、その義を賜物として、恵みによって彼にくださったというのが、信仰による義です。

1C 義人のいない世界

そこで聖書が、明らかにしているのは、正しい人はこの地上にだれ一人もいないということです。「詩 14:2-3 【主】は天から人の子らを見下ろされた。悟る者神を求める者がいるかどうかと。3 すべての者が離れて行きだれもかれも無用の者となった。善を行う者はいない。だれ一人いない。」

私たちは、アブラムの生涯が、どう見ても、正しくないのを見ています。妻を自分の姉妹だと言って、ファラオの妾にしまうのを、私たちは読みました。その前、ノアは、正しい人だと主は言われていたのに、彼はぶどう酒に酔って、全裸で寝ていました。モーセは、岩に語れと命じられたのに、怒り狂って、二度、岩を打ち、主を聖なる方としませませんでした。聖書を読めば読むほど、この人こそ私の英雄としたい人が、どうしても英雄にできない、しくじりをしています。そこには、歴然とした真理があるのです。それが、「正しさを、人に求めることはできないのだ」ということです。

そして、正しい方はただひとりだけ、神だけなのだということです。そして、キリストが、その正しい方であり、この方が神から来られ、神の独り子であることが証しされているのです。主は、十字架の上で死なれた時に、ずっとそばで見ていた百人隊長が、「この方は本当に神の子であった(マルコ 15:39)」と言いました。これまで、神のしもべと呼ばれている人々が出てきましたが、アダムか

ら受け継いだ罪を持っていない人はだれ一人いませんでした。しかし、この方はそうではなかったのです。それで、この方こそが神が人となられたことが分かったのです。

2C 不敬虔な者たち

信仰による義について、「ずいぶん、いい加減な教えだな。働きのない者を、ただ信じるだけで義と認めるなんて、都合が良すぎる」と思う人がいます。その人は、しっかりしているのではなく、逆です。自分が全くできていないことに、悲しいかな、まだ気づいていないのです。信仰による義は、不敬虔な者を敬虔だとしていく、安易な、自動販売機のようなものではありません。その逆で、敬虔になるために努力しても、全然、神の正しさに近づけないぐらい、神の正しさは完全であることを教えているのです。

イエス様のところに、金持ちの青年が近づきました。彼は、永遠のいのちを得るためにはどうすればよいか？を尋ねました。その時、イエス様は、十戒を取り上げられたのです。「マルコ 10:19 戒めはあなたも知っているはずです。『殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽りの証言をしてはならない。だまし取ってはならない。あなたの父と母を敬え。』」つまり、戒めを守ることによって、永遠のいのちに至ることを教えておられるのです。彼は、これらは少年のころから、すべて守ってきたと言いました。相当、真面目な人です。

そして主は言われるのです。「10:21 イエスは彼を見つめ、いつくしんで言われた。「あなたに欠けていることが一つあります。帰って、あなたが持っている物をすべて売り払い、貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を持つこととなります。そのうえで、わたしに従って来なさい。」主は、彼をいつくしんでおられます。そして、彼ができていないことを一つ教えられました。自分にとって、金があることが支えだったのです。自分ができていると思っていましたが、できていないことに、はっきりとイエスに明らかにされました。ここで、彼はひざまずいて、「私は罪人です」と言えばよかったのです。ところが、悲しい顔つきになって、去ってしまいました。

2B みなされる義

そこで、「**認められた**」という言葉に注目してください。これは、頑張っていたから、認めてあげるという意味ではありません。「みなす」と言い換えるといいでしょう。実際は正しいのではないのです。正しいと数える、みなすということなのです。

1C 不敬虔な者の義認

アブラムの生涯から、信仰による義をパウロが、ロマ書で説明しています。「ロマ 4:2-5 もしアブラムが行いによって義と認められたのであれば、彼は誇ることができます。しかし、神の御前ではそうではありません。3 聖書は何と言っていますか。「アブラハムは神を信じた。それで、それが彼の義と認められた」とあります。4 働く者にとっては、報酬は恵みによるものではなく、当然支払

われるべきものと見なされます。5 しかし、働きがない人であっても、不敬虔な者を義と認める方を信じる人には、その信仰が義と認められます。」働きがないのに、不敬虔な者を義と認める方を信じるのです。それで、その人が義とみなされるのです。

2C キリストの現れ

ですから、少し変なのです。不敬虔なのに、正しいのです。欠けがあるのに、完全なのです。弱いのに、強いのです。この矛盾が出てくるのは、その人ではなく、神がおられ、キリストが現れているからです。神が恵みによって、その人を立たせてくださっているからです。本人は、もろい器です。けれども、その器に、とてつもない高価な宝石が入っているのです。そして、そのことを信じていなければいけません。その矛盾に、いつも葛藤します。アブラムは、全く子がないのに、子孫が星のように多くなることを信じないといけなかったのです。その矛盾に生きるのは、ただ、信仰によってのみなのです。

1D 御霊による従順

信仰によって義と認められた人は、もはや、自分自身で義を神の前に立てようとしません。神の義が、自分自身に現れることを願います。つまり、神が、御霊によって言われることに、従順になるのです。自分が何かをするのではなく、神がしておられること、しようとされることに、自分には力がないけれども、または、理解できないけれども、それに従うのです。そして、従順になる時に、主ご自身が行ってくださいます。

2D 私の内におられるキリスト

それで、自分ではなく、自分からキリストが現れるのです。「ガラ2:20 もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」キリストがおられること、これが、私たちの生きる目的です。多くの人が、自分が良くなることを求めます。そうすると、人生つまづきます。良くなれなれないのです。良い方はただ神だけで、キリストだけです。自分が心の中心から退き、キリストに来ていただき、この方に働いていただくのです。このことを、信じることによって行います。信じる従順によって、主が働かれるように、自分が譲るのです。